

古き大会を訪ねて 当時活躍したレジェンドたち

地域によっては寒梅の季節。天候不順で大雪に悩まされた地域もあるが、春を呼ぶといわれる如月だ。^{きさらぎ}新型コロナ流行の騒ぎはまだまだ収まらず、競技会どころではない。マスターズ会員のみなさんはエネルギーを持て余しているはず。今はしっかりそのエネルギーを蓄えて、今月は趣を変えて、今まで紹介した人たちを除いたレジェンドの顔を軸に、過去を彩った大会をプレーバックした。

写真／BBM

“出るわ、出るわ”の第1回 全日本大会は好記録に沸く

全日本マスターズ陸上が始まったのは、マスターズ連合創立と同じ年の1980（昭和55）年だが、そこまでは伏線があった。全日本マスターズの第1回が始まる2年前、1978年と79年に行った西日本マスターズ陸上だ。

連合創立前、すでに活動を開始していた和歌山マスターズのみなさんが、一致団結して開いたのが西日本マスターズなのだ。西日本とはいっても、北は東北、南は九州からの参加を見た。

それはともかく1980年に幕を開けた第1回全日本マスターズ。同年の10月18、19日にマスターズ陸上発祥の地である和歌山市の紀三井寺公園競技場がその舞台。今までにも何回か紹介しており、重複するかもしれないが、そこはお許しを願って。

民謡『串本節』をアレンジしたマーチに乗って足音高く入場行進したのは、44都道府県から参加した447人のレジェンドたち。和歌山市消防本部音楽隊が見事な演奏を披露した。

和歌山マスターズクラブ（当時）の副会長・石井茂十郎さん（67歳）のユーモアに満ちた選手宣誓に会場は沸いた。いよいよ競技開始。ただし、最終日は豪雨といっていいほどの天候だったが、満を持していたオールドパワーは「これくらいの雨なんて」と。2日間で開催した日本最高（当時）記録は、男女22種目で32、同タイ記録4

と実りのある内容となった。

会場の目を最も集めたのが男子三段跳の小掛照二さん（47歳・東京）だ。それもそのはず、小掛さんといえば1956（昭和31）年に三段跳で16m48の世界新記録をマークし、国民的ヒーローになった人だ。今回は20年ぶりに登場。

「久しぶりにビットに立ったのはいいが、84kgの体重がね。思ったように跳べなかった」と、11m78にとどまった。勝ったのは大分の相部憲郎さん（46歳）で、13m17をマーク。「雲の上の人に勝つとは」と大喜びだった。

男女の100mも見どころの一つだった。男子は70～74歳の部で対決した一本譲さん（70歳・福岡）と、杉本正人さん（71歳・山口）の一騎打ちだ。共に脚自慢を自認するスプリンターで、レースは予想どおりの接戦となり、ほとんど同着のフィニッシュ。タイムはご兩人とも15秒1で、凱歌は一本さんに上がり、福岡vs山口の“巖流島の対決”を制した。一本さんは連載中の『マスターズを彩るレジェンド』に登場を願う人物の一人。連合の立ち上げに協力を惜しなかった人で、門司鉄道局に勤務中、日本選手権の4×100mRで5回（1936、37、46、47、48年）タイトルを取っている。“3走の名手”とうたわれた。

一方の女子100mは、男子と対照的に若い35～39歳の部が注目を集め、こちらも手に汗の接戦で、同タイムの13秒4で両者フィニッシュ。勝ったのは徳島の渡川孝子さん（37歳）で、連載中のレジェンドの9回（2月号）で紹介した。

惜しくも2位の高橋恭代さん（35歳）は地元和歌山の会員で旧姓・三嶋。高橋さんも渡川さんと同じく、400mの元日本記録保持者であり、地元では現役時代に絶大な人気を博した。

最優秀選手は女子が100mと走幅跳を制した渡川さんで、男子が地元和歌山の冷田嘉平さん（52歳）だった。冷田さんは50～54歳の部100m12秒5、200m25秒2、400m59秒0で三冠達成。このうち、200mと400mは日本最高記録だった。

なお、先の三段跳の相部さんは、現在のマスターズ日本記録のM60・三段跳に12m01で名前が載っている。1994年の鹿児島マスターズ選手権で



第1回全日本マスターズの選手宣誓をする石井さん



第1回大会に三段跳の元世界記録保持者・小掛さんが参加

出したもので、60歳だった。

“出るわ、出るわ”の記録ラッシュで閉幕した大会に五輪の金、銀メダリストの織田幹雄会長と西田修平副会長の両大御所も「思っていた以上のレベルの高さだったね」と感嘆しきり。

第10回国際大会は参加者が初の1000人超え

第1回大会から9年が過ぎた1989(平成元)年を迎えると「10周年記念大会は発祥の地、和歌山で」の機運が高まり、第10回国際・全日本マスターズ記念大会として、同年10月14日から3日間の日程で行われることになった。

和歌山ばかりの紹介か、といわれそうだが、誕生の地ということで、ご了承を願いたい。参加者は1235人と、大会始まって以来、初の1000人超えとなった。

参加年齢枠も従来の垣根を外し、男女とも22歳からとし、93歳までがレースを楽しんだ。織田会長の「生涯スポーツのマスターズはゆりかごから墓場まで」が理想と、年齢の範囲を広げたのだ。つまり若者から高齢者まで陸上を楽しもう、である。

今大会の最年長93歳は台湾からやってきた王錦昌(ワン・チンチャン)さんだ。アジア地域で知られたマスターズのヒーローなのだ。2年前の1987年に90～94歳の部100mで、20秒67の力走を見せ、電気計時世界記録保持者となった実力者である。

多くの報道陣が注目するなか、王さんが100mをスタンディングスタイルから飛び出した。対する相手は、日本のトラック出場者で最年長となる86歳の竹信友則さん(鳥取)。王さんと違いクラウチングの姿勢からスタートした。

二人の争いは40m付近まで横一線だったが、そこは年齢差。次第に竹信さんがリードして、21秒93でフィニッシュした。王さんは22秒46。フィニッシュ後、王さんは「きょうはスピ

ードがもうひとつでした。でも楽に走れた。メダルまでもらえて。またメダルが増えちゃった」とご機嫌だった。

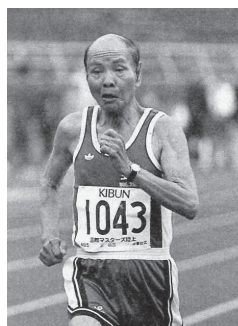
女子の5000mはW30とW25が同時スタートしたが、W25にあの増田明美さん(25歳・東京)が出場とあって盛り上がった。ところが先にフィニッシュテープを切ったのは、W30の黒崎しのぶさん(31歳・大阪)だった。

黒崎さんは16分57秒97の日本新でフィニッシュし、増田さんの17分34秒02をしのいだ。黒崎さんは旧姓・阿部。大体大の出身で、学生時代は1500mと3000mで1978、79年と関西インカレを制覇した。今大会は5000mで調子に乗り、800mに2分18秒22の大会新、1500mを4分36秒34の日本新で3種目に勝ち、女子優秀選手賞を獲得した。それだけではなく、夫の幸雄さん(31歳・大阪)もM30・1500mで4分13秒20の1位となり、二重の喜びとなった。

M50・三段跳には名手といわれた桜井孝次さん(53歳・茨城)が登場。桜井さんは1956年のメルボルン五輪から3連続五輪出場を果たし、三段跳のベストは16m18(1963年)だ。今大会は惜しくも追い風参考になったが、12m15で1位、貫禄ぶりを披露。

跳躍といえば女子のW55・走幅跳には浜松(旧姓・高橋)ヨシ江さん(57歳・東京)が姿を見せた。浜松さんもメルボルン五輪に出場したジャンプの第一人者。現役時代の空中での“そり跳び”そのままに、4m00を跳んだが、これは追い風参考。許容風速以内では3m98だったが、これはW55の日本新。「久しぶりの走幅跳でしたが、まずまずだったかな」と浜松さん。

W25のやり投では世界選手権、ソウル五輪など3大会の代表だった松井江美さん(26歳・東京)が出場し、51m22の空中アーチを。ベストの60m52には遠く及ばなかったが、「陸上を楽しむマスターズの雰囲気に合わせてしまっただけ」と苦笑い。



第10回の記念大会ではM85で日本記録保持者と世界記録保持者の対決。王さんは2位に

10周年記念とあって、マスターズのレースとは別に、女子1マイル(1609.3m)の競走も行われ、本邦初公開として、興味を持たれた。レースはS・シルマさん(宮崎沖電気)が引っ張り、4分42秒41でトップ。井上ひとみさん(三田工業)が4分45秒66で2位に入った。

レースだけにとどまらず、ジョギング教室などもあって、メキシコ五輪マラソン銀メダリストの君原健二さん(福岡)らが指導に当たった。

男子のMVPはM35の中距離で活躍した平野武史さん(35歳・和歌山)が射止めた。800m 2分00秒37、1500m 4分07秒54の各日本記録を出したことが評価された。



和歌山はマスターズ陸上発祥の地として、全日本大会の第1回に始まり、第10回大会ほか、第32回大会、第38回大会と4回も開催している。また機会を見て大会の内容を紹介したい。

第7代会長に中嶋誠次氏(神奈川)を選出

(公社)日本マスターズ陸上競技連合は11月1日、大阪市内で総会を開き、役員人事を検討、第7代会長に第20期(2018～19年)の常務理事で競技運営委員会委員長の中嶋誠次氏(神奈川)が選出された。役員は以下の通り。

会長	中嶋 誠次
副会長	黒木 通哲
	田上 静之
	加藤 崧
専務理事	坂本 修一